校長室だより～湘南の空～

第 30 号

令和６年１月９日

元旦に発生した能登半島地震により亡くなられた方々に心からお悔やみを申し上げるとともに、被災された全ての方々にお見舞いを申し上げます。

年が明け、３年生は全力を傾け勉強していることと思う。湘南の仲間と培った力を信じてほしい。全員が第一志望校に進学することを心より願っている。

昨年 12 月 22 日の全校集会では、熱気を感じることができた。一回りも二回りも大きくなった生徒の皆さんは実に頼もしい。取分け３年生はたくましく、眩しかった。目先の結果にとらわれず、努力し続ける湘南生に敬意を表したい。２年生は湘南のリーダーとしても大きく成長したように思う。勉強、行事、部活動に取り組む姿勢が周りの人に勇気を与えている。

昨年 12 月 24 日（日)、第 47 回神奈川県アンサンブルコンテストが行われ、本校から地区代表として金管八重奏が研ぎ澄ました音色を響かせ、木管八重奏が温かいハーモニーを披露し、ともに金賞を受賞して東関東大会出場を決めた。吹奏楽部の皆さんは、演奏を楽しみ、また聴衆を楽しませようとする中で音楽の本質に迫っているように思う。

また、新春恒例のスキー教室の参加人数は増加傾向で、今回は 240 名以上と史上最多を更新するなど、湘南生の好奇心と行動力は健在である。

今年も湘南生の挑戦から目が離せない。

能動的な図書館の利用方法

昨年 12 月 23 日（土)、本校図書館及び多目的ホールで第 10 回かながわ高校生ＰＯＰフェスタ兼第３回全国高校生図書研究大会が行われた。（ＰＯＰとは、ポップ広告“Point of purchase advertising”のことで、小売店の店頭に置いたり、商品につけたりする広告である。）神奈川県、北海道、長崎県をオンラインで結び、手作りのＰＯＰを発表し、「ＰＯＰ王」内田剛さんに講演をしていただくなど充実した内容だった。運営は主に本校図書委員会と放送部の皆さんが支えており、ここでもまた湘南生の活躍に触れることができた。

この図書館を舞台に、本校定時制の生徒も大きな成長を遂げている。

昨年 11 月 19 日（日)、東京の六本木ヒルズで「第 71 回全国高等学校定時制通信制生徒生活体験発表大会」が開催され、各都道府県・地域の代表生徒 60 人が、定時制通信制に通う高校生としての青春メッセージを発表した。神奈川県代表として、本校定時制２年生の石井 菜子(いしい なつこ)さんは、題名「知の起点『あぁ面白い』」で、湘南高校定時制での先生や仲間との出会いを通して、学ぶことがワクワク、ドキドキして面白いという体験を活き活きと発表し、見事に「石澤奨学会賞」を受賞した。

さて、湘南高校を選んだ理由は、ズバリ、図書館です。高く広いドーム状の天井で、蔵書数は約七万冊。毎日、毎日、本を好きなだけ読んでも尽きません。

湘南定時に入ってから、想定外のことが起きました。過去の私にとって、図書館は外界から離れ、自己の世界に入り込める、唯一の「逃げ場」でした。しかし、私にとっての「図書館」が変化しました。今は、全日制の知人や、十代から七十代の幅広い年代の図書館仲間と「交流」しています。また、来館される先生方との会話の中から、新たな自分の一面に気づいたこともありました。

あるとき司書の先生に、北杜夫の本がとても面白いと話すと、書庫の奥から、昭和時代の全集を出してくださいました。「新しい面白い！」に心が騒ぎました。このように、自分一人で本からの知識を楽しむだけでなく、本の内容や感想を自ら発信し、様々な情報を受信する、能動的な図書館の利用方法に変わったのです。（１月２日 ＮＨＫラジオ第２放送より）

Pursue your Dream with eternal Optimism「絶対にへこたれない」４

若き日の根岸英一先生の思い

令和３年７月 21 日の全校集会で紹介した、本校第 28 回卒業でノーベル化学賞受賞者である根岸英一先生が東京大学工学部応用化学科の大学３、４年生の当時に書いた文章を再掲する。

昭和 32 年、33 年、学年縦断的なクラス雑誌「あるけみすと」にそれぞれ掲載された文章の一部である。因みに当時は「もはや戦後ではない」と経済白書が宣言した時代だ。

日本の化学技術について、「(外国の）すぐれた点をどんどん輸入するのは一向にかまわないと思います。しかし、輸入一方で輸出するのは味の素ひとつでは寂しいと言うのです。まねも結構でしょう。しかし、なにからなにまでさるまねをしていて自分からは何一つ創り出さないでいるのでは、いつまでたっても外国よりある距離をおいてうしろにいなければならない。」

人間学について、「今日本で一番必要なことは、…借りものではない、しっかりした精神的なバックボーンを持つことだと思う。…日本は今こそ進むべき路をあやまることなく、正しく大人として成長しなければならない時に来ていると思う。」

当時の化学技術に対する焦燥と、それに対する処方箋が簡単に実現できない現実が、その後根岸先生をアメリカに向かわせた原動力になっていたと考えられる。この根岸先生の思いは、現在の日本に最も必要な精神ではないだろうか。日本は、新しい時代を切り拓くため、「借りものではない、しっかりした精神的なバックボーンを持つこと」を必要としている。理念・目標を掲げ、突き進む中で見えてくる課題を解決していくことが、未来の世界を動かすに違いない。